

第七章 新しい生活

ある11月の晩、雨が降っています。

マリラとアンは暖炉の前に腰掛けています。

マリラはアンを見て、ほほ笑みます。

アンはもう少しで15歳です。

アンは背が高く、かわいい女の子で、マリラはアンのが大好きです。

しかし、マリラにはある問題があります。

マリラは目がよく見えません、なぜならマリラの目は疲れていて弱っているからです。

「困った目なこと！ 私には新しい眼鏡が必要だわ」とマリラは思います。

「私は明日、それらを買うつもりよ」

「アン」とマリラは言います。

「あなたはもう、大きな女の子だわ。自分の将来について考えるべき時よ。あなたはとても優秀な生徒だとステイシー先生が言ってるわ。シャーロットタウンのクイーンズカレッジで勉強したいと思う？ あなたは先生になりたい？」

「ええ！」とアンは喜んで言います。

「私、先生になりたいわ！ でも、クイーンズカレッジはお金がかかるし…」

「それについては心配しないで」とマリラは優しく言います。

「マッシュと私が大学のためのお金を払うから」

アボンリー出身の他の6人の生徒たちも、クイーンズカレッジに行きたがっています。

彼らはクイーンズカレッジクラスと呼ばれる授業で、放課後に勉強します。

彼らはクイーンズカレッジに入学するには、その前に大きな試験のために勉強しなければなりません。

アンとギルバート・ブライスは最も優秀な生徒です。

6月に、アンとその他の生徒たちは、クイーンズカレッジでの大きな試験のための準備ができます。

彼らはシャーロットタウンに行き、そこに1週間滞在します。

アンがグリーン・ゲイブルズに戻ると、アンはマリラとダイアナに難しい試験について話します。

ある美しい夏の晩、ダイアナがアンに会いにやって来ます。

ダイアナは手に新聞を持っていて、興奮しています。

「アン！」ダイアナがうれしそうに叫びます。

「見て、あなたの名前が新聞にあるわ！ あなたはクイーンズカレッジの試験で最も優秀な生徒なのよ！ あなた…そしてギルバート・ブライス」

「何ですって！」とアンは叫びます。

「新聞を私に渡してちょうだい！」

新聞には200人の名前があり、アンの名前は最初にあります。アンの名前と、ギルバートの名前です！

アンはマリラとマシューのところに走って伝えます。

二人はアンのことをとても誇らしく思います。

アンはグリーン・ゲイブルズを去り、シャーロットタウンにあるクイーンズカレッジに行きます。

アンはギルバートと同じクラスですが、二人は話をしません。

アンはたくさん勉強をして、6月にはもっと試験があります。

アンは試験に合格して、レッドモンドカレッジで奨学金を得ます。

アンはグリーン・ゲイブルズで夏を過ごします。

ダイアナがアンを訪ねてきて、「ギルバートはレッドモンドカレッジに行けないの、なぜなら彼のお父さんが大学のためのお金を払えないからよ。ギルバートはアボンリー学校で教えるつもりなの」と言います。

「あら！」とアンは言います。

アンは突然、悲しくなります。

数日後、マシューは気分がすぐれません。

マシューの心臓は弱っていて、マシューは地面に倒れて死にます。

アンとマリラはとても悲しく、二人はたくさん泣きます。

その夜、マリラはアンのお部屋に行き、「泣かないで。あなたには私がいるし、私にはあなたがいるのよ、アン。私はあなたが大好きよ」

ある日、マリラはキッチンに腰掛けていて、「目がとても痛むわ。よく見えなくて、働けない。それに他のこともある。私はこの家を売らなければいけないわ。アボンリーのここのアビー銀行は大きな問題を抱えていて、私のお金はその銀行にある。今、私にはお金がもうこれ以上ないの！」

そして、マリラは泣き出します。

「ああ、マリラ、どうか泣かないで」と、アンは自分の腕をマリラに回しながら言います。

「私、あなたをあらゆる方法で助けるつもりよ。私はあなたを有能な眼科医に連れて行くことができる。それから、あなたは家を売る必要はないわ。私、レッドモンドカレッジには行かない。あなたのそばにいるわ。私はプリンス・エドワード島の学校で教えることができるわ」

その午後、リンド夫人が訪ねてきて、「私はあなたに知らせがあるのよ、アン。あなたはアボンリー学校で教えることができるの！」と言います。

「いいえ、私はできないわ」とアンは悲しそうに言います。

「ギルバートがここで教えるのよ。私は別の学校を見つけなきゃならないけど、私はマリラと一緒にグリーン・ゲイブルズで暮らしたいの」

リンド夫人はアンにほほ笑んで、「ギルバートはマリラの問題について知ってるわ。ギルバートはホワイトサンド学校に行くつもりなのよ。アボンリー学校はあなたのものなの」

「まあ、それはすてき！」とアンは驚いて言います。

「それにギルバートは何て親切なの」

数日後、アンはギルバートに会います。

アンは立ち止まって、自分の手を差し出します。

「ギルバート」とアンは言います。

「アボンリー学校での仕事をありがとう。あなたってとても優しいのね。何もかも全部ごめんなさい。これからはお友達になりましょう、お願い」

ギルバートはほほ笑んで、アンの手を取ります。

ギルバートは、「うん、友達になろう！」と言います。

そして二人は長い間、一緒に話をします。

その夜、アンは家にいて窓辺に腰掛けています。

アンは空の星々を眺めて、「私には新しい仕事があるし、大切な友達がいる。これで、私はマリラを本当に助けることができるわ。私はグリーン・ゲイブルズで幸せになるわ」